

# 論説文の意味構造

——「社説」六十編の分析による——

伊\* 土 耕 平

## 一 はじめに

論説文において、例えば、主張を表す文はその文章の終わりの方に置かれることが多い。このことは常識的に考えても首肯されると思うが、では、具体的にどのくらいの数字でそのようになっていくのか。また、そういう文の主語はハでマークされているのかガでマークされているのか。これらのことに明確に答えているデータは、私の知る限り、ない。そこで、『朝日』『毎日』『読売』三紙の「社説」六十編を対象に、調査をした（社説は論説文の代表格である<sup>1)</sup>。本稿はその結果をまとめたものである。論説文に関する基礎的なデータを提出することが本稿の目的である。

今回調べたことは次の四点である。①文を、それがはたす「役割」によって、場面・状況を述べる文（「場面文」と呼ぶ。「バ文」と略す）、問題点や疑問点について述べる文（「問題文」「モ文」）、主張したい事柄を述べる文（「主張文」「シ文」）、場面・問題点・主張のそれぞれについて補足事項を述べる文（「補足文」「ホ文」）の四つに分類する。社説六十編全体を見渡したとき、それぞれはどのよう

に分布しているか。（具体的には、一つの文章を十の「区間」に分け、それぞれの「区間」にバ文ならバ文がいくつ出るか調べて、六十編全体の集計を出す。）②一つ一つの文のいわゆる主語がどんな助詞（ガ・ハ・モなど）でマークされているかということ、その文がバ・モ・シ・ホのいずれを表しているかということとの関係。（例えば、ガでマークされている文はバ・モ・シ・ホのどれに使われることが多いか、など。）③ガならガでマークされている文（「ガ文」と呼ぶ。傍線のないカタカナは助詞を示す）が、六十編全体を見渡したときにどのように分布しているか。（第一の区間にいくつ出ているか、など。）④ガ文ならガ文について、役割はどのように分布しているか（つまり①と同じことをガ文だけについて行なう）。

結果の多くは常識的なものだが、具体的な数字を出すことに意味がある。中には意外な結果もある。例えば、問題点について述べる文（モ文）は文章の末尾に近づいても減らない、ハで題目を表す文（ハ文）と題目が省略されている文（「準ハ文」と呼ぶ）とでは役割・分布が異なる、など。これらについては、五節で述べる。

後述のように、バ・モ・シ・ホという「役割」の認定は主観的である。したがって、客観性・明示性を重視する立場から見れば、本稿で提出するデータには価値がないとされるかもしれない。しかし、現段階では、文章の意味的な構造をまったく客観的に分析する手立てはまだ開発されていないので、主観を交えたものであっても、論説文に関

する基礎的なデータを提出することには意味があると思う。

従来の文章研究では、一つ一つの文章について、どの段落が全体を統括しているか、などといったことが問題にされてきた。本稿では、ある程度まとまった量の文章を分析して全体を見渡した時にどういうことが言えるか、に重点がある。また、段落の枠を外して、文の分布という形で文章の構造を見ようとしている点にも特色があろう。

## 二 仮説

ここでは、本文に入る前に、私の考える、論説文の基本構造に関する仮説について述べる。それによって、なぜ文を四分類したのか、本文とはどういうものか、などが理解されるだろう。

今回は論説文の代表として社説を扱うが、社説は、社会に起きているいろいろな事象を取り上げて、それについての自分(つまりはその新聞社)の意見を述べるものである。したがって、基本的には次のような構造を持っていると考えられる。

まず最初に、取り上げようとする事象を示さなくてはならない。例えば「オリンピックが行なわれた」「経済白書が発表された」など。

意見を述べるにあたって、自分(および読者)がどういう場面・状況に置かれているか、まず設定するのである。

次に、場面・状況に含まれている、または関連する、問題点や疑問点を指摘する。例えば「ドーピングがあった」「経済が加熱気味である」など。問題点や疑問点は、たいてい複数ある。いきなり意見を述べたのでは、読者が戸惑ったり、説得力が落ちたりする。

最後に自分の意見を述べる。「オリンピックのあり方を考え直すべきだ」「対策をたてよ」など。

そして、それぞれの段階で、必要があれば補足説明をする。例えば、「衛星中継された」「経済白書とはこういうものである」など。これ

らは、場面・問題点・主張という流れには直接関係ないものである。補足説明は、随時行なわれるものであるから、文章の全体にわたって現われることが予想される。

以上のことを図にすると図1のようになる。この仮説は常識から考えても首肯されようが、五節の(1)でみるように、データによっても証明される。

## 三 方法

以下に、調査の具体的な方法について順に説明する。

### (1) 調査対象

次の新聞の社説を対象にした(一日に二つの社説が載っているので合計六十編)。

・『朝日新聞』 一九八八年九月二七日～一〇月六日

・『毎日新聞』 一九八八年一〇月九日～一〇月一九日(一〇月

一七日を欠く)

・『読売新聞』 一九八八年一〇月一三日～一〇月二二日

(2) 文に番号をふる

それぞれの文章について、最初の文を①として順に番号をふっていく。次のようなものも一つの文に数える(これらを「第三水準の文」と呼ぶ。詳しくは五節(2)で述べる)。

ア、独立している会話文。次の②。

(例) ① 太郎が言った。② 「よい天気だ。散歩をしよう。」

イ、単純な倒置文。次の②のように、直前の文といれかえて何の問題もないもの。

(例) ① 散歩に出た。② 天気がよかったので。

ウ、いわゆる独立語。ただし、後続の文にその文を受ける言葉があるときのみ。

(例) ①するかしないか。②それが問題だ。

会話文は、アの②の場合は全体を一つと数える。それ以外の場合（「『……』と言った」など）は、修飾語扱いにし、一つの文とは認めない。

なお、これらの文は、(5)の「役割の認定」を行なわない。数の上では一応「文」と認めたが、やはり独立した完全な文とは認められないからである。結局これらの文は、量としては存在するが機能（役割）は持たない、という扱いをするのである。

(3) ガ文、ハ文などを認定する（文の「マーク」を決める）

一つ一つの文について、それがガ文ハ文などのいずれであるか決めていく。述語に直接かかる成分のうち、いわゆる主語（題目を含む）がガでマークされていればガ文、ハであればハ文である。スラであればスラ文、トイエバであればトイエバ文である。ただし述語は長めにとる。文末が、いわゆる補助語のときや形式体言・形式用言が使われているときは、直前の語と合わせて述語とする（次の傍線部）。

(例) 太郎も教師ではない。（モ文）

太郎が来ることになっている。（ガ文）

ガ・ハなどが複数あるときは、出現順にマークとみなす。ハが省略されているときは「準ハ文」とする。

(例) 太郎も今日は来なかった。（モハ文）

（私は）水が欲しい。（準ハガ文）

いわゆる主語のない文は、「無主語の文」と呼ぶ。

(例) 厳密な薬物検査。抜け道を探る選手。

(4) それぞれの文章について「主張」と「場面」を決める

その社説の内容にもとづいて決めるが、その際、見出しは必ず主張・場面のいずれか、または両方に使う。見出しは、分割したり、変形したり、言葉を補ったりしてもよい（例1）。また、見出しの外延が狭

すぎるとき、外延が広くなるように言い換えてもよい（例2の「場面」）。

(例1) 見出しが「暴落から一年、再発を防ぐ方法」のとき。

主張Ⅱ株価暴落の再発を防ぐ方法を考える必要がある。

場面Ⅱ株価暴落から一年がたった。

(例2) 見出しが「元首を兼ねるゴルバチョフ氏」のとき。

主張Ⅱゴルバチョフ氏に期待する。

場面Ⅱソ連で人事異動があった。

見出しを参照するのは、個人的な読みをできるだけ少なくするためである。文章の内容を読んで決めるわけであるから、どうしても主観が混じるが、やむをえない。

主張や場面は一つの文章の一つとは限らない。また、主張のない文章もある（単に感想を述べた文章など）。

(5) 一つ一つの文が、バ・モ・シ・ホのいずれであるか決める（「役割」の認定）

バⅡ「場面」と同意の文。または、「場面」を構成する一つ一つの出来事や事実を表す文。

モⅡ筆者が問題点や疑問点として取り上げた事柄を表す文。問題点や疑問点を構成する一つ一つの事柄を表す文。

シⅡ「主張」と同意の文。主張がいくつかあるとき、その一つ一つを表す文。

ホⅡ筆者が補足として述べている事柄を表す文。

いずれに認定するか迷うような場合、次のことを参考に（必ず従うというわけではない）。

バⅡ「～という」「～ようだ」などのように伝聞や推定などの形の文であっても、事実として扱われているのであれば、バとする。場面が「宇宙基地の計画が進んでいる」という類のものであれば、計画や予定も、まだ事実とはなっていないがバとする。

場面を構成する出来事に付随して起きたこと、場面が生ずる前の段階や歴史、場面のさらに奥にある背景、いわゆる枕の話などはホとする。

モII 場面に含まれる、または関連する事柄で、よくない・解決すべき・重要である・注意すべきなどの評価をされるもの。あるいは、ヘモ。だから「主張」ヘモ。しかし「主張」ヘという関係になるような事柄を表すもの。

シII 「せよ」「すべきだ」という意味をもつ文は大抵シだが、文章の内容に比べてあまりにとってつけたようなものは認めない(ホとなる。次節に例を示す)。また、主張の具体例(例、「すべきだ。例えばこんなことができる。」)は大抵ホ。

ホII 基本的には「ちなみに」という言葉をはさんで続けられる文がホである。パ・モ・シ以外のものと考へてほとんど問題はない。右に部分的に挙げたもののほか、「場面」に対する感想や推測や解釈、一般的に認められている事柄、その問題点を取り上げる理由、過去の事例、参考として引用する他人の意見、読者に馴染みがないであろうと思われる事柄に対する解説、などもホである。

これらの認定は、あくまで相対的なものである。例えば、場面に含まれる個別的な事実のみを表現する文であっても、筆者がそれをとくに取り上げているのであれば、パでなくモとする。最初に決めた「場面」「主張」を基準にして認定するのが重要である。

以下に、注意事項をいくつか述べる。まず、いろいろな形式が参考になる。「てほしい」「すべきだ」という形式はシであることが多い(当り前だが)、「とくに」「例えば」などはホであることが多い。パはムード形式をもたない、など。

実質的な内容をもたない形式的なものもある。これらもパの役割を

はたしているのであればパの文とする。

(例) 現在置かれている状況をみてみよう。(形式的パ文)  
次のことを実行すべきである。(形式的シ文)

一つの文に二つ以上の役割を含むと考えられる場合は、文末の述語を含む方で考える。

(例) 日本選手が金メダルをとり、茶の間も盛り上がった。  
↓前半はオリンピックのひとつであるが(つまりパ)、後半は単なるホである。この場合ホ。

指示語を含む文は、指示内容を含めて考える。

(例) ①オリンピックが行なわれる。②それを成功させよう。  
↓②の「役割」を認定する際、「オリンピックを成功させよう」で考える。

(6) 一つ一つの文の属する「区間」を明らかにする

「区間」とは、一つの文章をほぼ十等分した一つ一つであって、次の式で求められる値の小数点以下を切り上げたものである。

(パ)(シ)(モ)(ホ) × 10

例えば、三十個の文からなる社説であれば、最初から三番めまでの文が「1」区間に属し、四～六番の文が「2」区間に属する。

(7) 集計する

一つ一つの文について「マーク」「役割」「区間」が決まるのであるから、いろいろな集計の仕方が可能である。どのような集計をしたかについては、「はじめに」で述べた。

以上の説明ではわかりにくいところがあるかもしれない。次節で具体例として一つの社説を掲げ、説明を補うことにする。

#### 四 文章例

少し古くて恐縮だが『朝日新聞』一九八八年九月二十六日の「中東

和平へ今度こそは「すみ」と題する社説全文を掲げ、実際にどのような作業をするのか説明する。あらかじめ各文には文番号を付け、ハ文・ガ文などと認定されるものはハやガに傍線を引く。

①ペリシテ人の巨人ゴリアテに勇敢に立ち向かい、石で倒したダビデ（のちのイスラエル王）の話を知る人は少なくあるまい。

②パレスチナ解放機構（PLO）のアラファト議長は、このほどの欧州議会での演説で、イスラエルによる占領からの解放を求めて、投石などで反乱を起こしているヨルダン川西岸とガザ地区のパレスチナ人の若者を、このダビデに例えた。③さしずめイスラエルは、ゴリアテというわけだ。

④占領下のパレスチナ人による、この現代のゴリアテに対する反乱は、まもなく一年になるうとしている。⑤イスラエル政府は武力弾圧だけでなく、裁判なしの抑留、国外追放、家屋の破壊など、容赦ない態度で応じてきた。⑥すでにパレスチナ人数千人が死傷し、およそ一万八千人が獄舎に閉じ込められた。

⑦イスラエルによる占領と支配は、もう約二十年も続いている。⑧一日も早い解放を図る必要があることはくり返すまでもない。

⑨見通しは依然、不透明だが、パレスチナ人の間で、最近、新しい胎動が始まっており、これにまず期待をかけたい。

⑩第一は、PLOと被占領地のパレスチナ人指導者が被占領地からの解放実現のため、より積極的、具体的な態度をとるようになってきたことである。⑪パレスチナ独立国家の宣言や亡命政権の樹立などが討議され、アラファト議長始めPLO要人のアラブ諸国や西欧諸国に対する外交攻勢も強まっている。

⑫被占領地で抑圧されてきた人々が立ち上がったいま、PLOもこれまで以上に積極的に動かざるをえなくなったのだ。

⑬第二は、PLO側に柔軟な姿勢が見られるようになったことである。⑭アラファト議長は欧州議会での演説の冒頭、ヘブライ語で「良いお年を」（新年のあいさつ）と呼びかけ、聴衆をびつくりさせた。⑮同議長は「良い年は平和の年、パレスチナ人にとって平和の年を意味する」と語った。

⑯アラファト議長は、イスラエルがパレスチナ人の国家創設の権利を承認するならその条件付ながら、「イスラエルの生存権を認める」と述べた。⑰さらに「いかなるイスラエル人とも、国連で会うつもりだ」と話した。⑱オリーブの枝を高々とかかげたといえる。

⑲もとより前途には、難関がいくつも控えている。⑳まずPLO内部にすら、イスラエル承認や亡命政府の樹立などについて反対論がある。㉑十月にアルジェで開かれる予定の、パレスチナ人の国会であるパレスチナ民族評議会（PNC）は、これらの問題点を協議する見込みだが、さらに延期の可能性もある。

㉒シリアやリビアなど、アラブ強硬派諸国は、イスラエルとの和平そのものに消極的だ。㉓他方、イスラエルはPLOはテロ団体だとし、交渉相手と認めようとしない。

㉔PLOとアラブ諸国が、より現実的な立場に立って、和平解決に向け意志を統一し、和平攻勢の輪を広げていくことを望む。㉕イラン・イラク戦争も一応、終息し、アラブ世界にはパレスチナ問題の解決に全力投球できる環境が整っている。

㉖イスラエルは十一月に総選挙を迎える。㉗強硬派のリクード（右翼連合）と比較的穏健派の労働党の支持者は、ほぼ同数と予想されるが、イスラエル国民が占領地問題の解決のためより良い選択をしてほしいと思う。

㉘米国はシュルツ國務長官を中東に派遣、和平解決の糸口をさぐってきた。㉙ソ連もアラブ諸国との国交関係を広げ、中東和平国際会議

開催に意欲をみせている。<sup>③④</sup>四十年越しの中東紛争の解決の面でも、米ソは新デタント（緊張緩和）の効力を発揮してもらいたい。

まず、「主張」と「場面」を決めなくてはならない。全体を一読すれば、見出しがそのまま主張であることがわかるであろう。作業に使う「主張」としては、「中東和平へ今度こそはすみをつけよ」などのようにした方が、明確になってよい。

「場面」は何か。私は「パレスチナ人の間で新しい動きがある」とした。中東にはいろいろな状況があるが、「主張」に「今度こそ」と言う以上、何か新しい状況があるわけである。それを「場面」にも含めるべきである。「場面」の他の候補について、また、それらをなぜ「場面」として採用しないかについては、後述する文<sup>②</sup>と<sup>⑨</sup>の説明を参照されたい。

以下では、右の例文中の問題になりそうな部分を取り上げて、補足説明をする。

文<sup>①</sup>は、問題ないと思うが、ホである。枕の話であり、かつ、パ・モ・シのいずれでもない。また、述語は「少なくともあるまい」で、主語は「人は」である。つまりハ文である。また、1区間に属する。全体が三十文であるから、三文ずつ区間は切れる。最後の文<sup>②③④</sup>が10区間に属する。区間についての説明はこれ以上しないことにする。

次の<sup>②</sup>は、バカホかで迷うであろう。アラファト議長が欧州議会で演説をしたこと自体は「新しい動き」の一つであるから、そのかぎりではバである。しかし、述語は「例えた」である。既述のように、文の内容は述語を中心にして考えなくてはならない。アラファト議長がパレスチナ人の若者をダビデに例えたということ自体は、バというほのことではない。よってホとする。

③は筆者の解釈であるからホである。述語は「ゴリアテというわけ

だ」。「という」も「わけ」も形式的な語である。ただし、主語がハのときは普通とにかく文末まで係るわけであるから、述語が「わけだ」であろうと「ゴリアテというわけだ」であろうと、実は関係ない。問題はガのときである。このことについては文<sup>⑩</sup>のところで述べる。

④⑦は、バの前段階であるからホである。⑧は意見には違いないが、あまりにとってつけたようなものであるし、「主張」の「今度こそ」というのと「くり返すまでもない（＝これまで何度も言った）」とは相容れない。よってシでなくホである。

⑨は「不透明だが」まではホ、「始まっており」まではバだが、文末の述語の部分で考えるとシとなる。「新しい胎動に期待をかける」ということと「今度こそはすみを」ということはほぼ同意であるといつてよいと思う。なお、この文は「我々は」などの主語が省略されている。よって準ハ文である。

⑩は、「場面」を構成する事柄であるからバである。文末に形式的な語が多いので、述語は「とる」以下という長いものになる。すると「指導者が」も主語になる。「ことである」のみを述語と考えれば主語にはならないであろうが、文章の研究においては、主語がガ・ハいずれでマークされるかということが重要なことなので、主語はなるべく拾ったほうがよい。そのために述語を長めにとるのである。なお、この文にはハもある（「第一は」）、ハガ文である。

⑪は「外交攻勢も」とあるのでホとしたくなるが、内容的にはやはり「新しい動き」の一つである。よってバ。同様に<sup>⑬⑭⑮</sup>もバである。<sup>⑫</sup>は、筆者の解釈なのでホ。また、<sup>⑯</sup>と<sup>⑰</sup>は準ハ文である（それぞれ「アラファト議長は」「これは」が省略されている）。

⑱は（形式的な）モ文である。<sup>⑲</sup>⑳は（実質的な）モ文である。なお<sup>㉑</sup>はスラガ文、<sup>㉒</sup>はハモ文である。

㉓は、「主張」とほぼ同意なので、シである。㉔はホであろう。

「戦争が終って環境が整った」というのは「パレスチナ人の動き」(つまりバ)ではない。  
 ②③以下はすべてホである。②と③は意見であるが、イスラエルの選挙のことは個別的すぎる問題であるし、米ソに対する注文は唐突である。よってシとはしない。

## 五 結果と考察

「はじめに」で述べた四つの調査項目について、結果を示し、考察を加える。

### (1) 「役割」の分布

六十編の社説を見渡したとき、バ・モ・シ・ホがどのように分布しているか、つまり、1区間なら1区間に現れるバ文ならバ文の数を六十編全体で単純に合算するとどうなるか、は表1のようにになった(表の中では「役割」を示す傍線は省略して「バ」などのように表記する)。「マーク」の違いは無視している。\*印は、独立語など、役割の認定をしない「第三水準」の文である。

表1にもとづいて区間ごとに百分率を求めてグラフにすると図2のようになる。例えば、1区間ではバ文が七六個で1区間のすべての文は一四六個であるからバ文は約五二パーセントである。

このグラフによって、二節で述べた仮説はほぼ証明されたとと言えるであろう。すなわち、バは最初に多く、モは途中に多く、シは最後に多く、ホは全体に出現する。さらにわかったことは、1区間において、ホよりもバの方が多いということである。つまり、社説において、枕の話など(つまりホ)をするよりは、場面を明確にすることの方が多いためである。もっとも、ホが約三六パーセントあるの多いと感ずる人もあろう。そういう人は、日本の新聞はすぐに話題に入らないので困る、などと思うであろう。ともかく、このような数字が明らかになっ

た。

モが文章の終わり近くになってもそれほど下がらないのは予想外である。考えられる理由は、自分の意見を主張の形でなく問題提起の形で表現することが好まれるということである。ちなみに私の印象としては、主張の明確でない社説が割合多い。

シが終わりの方で多くなっているのはよいのだが、10区間でさえ約二三パーセントにしかならない。この数字でも主張が明確でないという印象は裏付けられる。もっとも、10区間には四六個のシが現れる。すると、一つの社説に、この区間に一個弱のシがあることになり(四六文・六〇編)、それなりに主張は明確であるという議論も成り立つ。いずれにせよ本稿はデータを提出することに目的があるので、このような議論に深入りすることは避ける。

### (2) 「マーク」と「役割」の関係

まず、バ・モ・シ・ホそれぞれにどういうマークを持った文が使われているかということを示すと表2のようになる。第六位以下にはハモ文、スラガ文などが現れるのだが、それらは省略した。

全体的にハ文が多い。そもそもハ文は使用そのものが多いのであるから(表4)、このことは当然である。しかし、論説文の基本としてこのことは押さえておくべきであろう。つまり、ある(既知の)話題や小話題に説明を加えていくのが基本なのである。<sup>(5)</sup>

シの一位が準ハ文であるのは興味深い。これは、その文章の話題や、主張をする人は明確なので省略されることによるのであろう。

ガ文が、総使用数は三位であるにもかかわらず(表4を参照)、バとモで二位と健闘していることに注目したい。ガは、よく言われるように新出の事柄を表すものであるから、バやモにもってこいなのである。場面や問題点は新出事項として扱われる可能性が高い。

ここで「水準」について説明しておく。文をマーク別にみると二十

二の種類があったが、使用数をみるとハ、準ハ、ガ、モ、ハガの五種類が百以上である。これらを「第一水準」の文と呼ぶことにする。以下で主に取り上げるマークはこの五種に限定する。次に、ハモ、モガ、モハ、準ハガ、準ハモの五種類は使用数が四十〜二十しかなく、スラ、コソ、ホドモなどでマークされる文と無主語の文は、使用数がさらに少ない。これらを「第二水準」の文と呼ぶことにし、以下ではこれらのマークについて文数を云々することはない。最後に、「役割」の認定から外れた文を「第三水準」とする(二節(2)を参照)。これらは文数には入るが、つまり量的には存在するが、「役割」を持たないものである。

次に、第一水準について、四つの役割のうちどれを果たすことが多いかということについてみた結果を表3に示す。準ハ文の三、四位のぞいて、すべて順位は同じである。準ハ文は要するにハの省略されたものであるが、シをはたす割合がハ文に比べてかなり高い。つまり、単にハのあるなしではなく、役割分担に違いがあると言える。

また、ガ文のモとバが高めであることはこれまでみたことと同じである。さらにモ文のホが高いのが注目される。これはモという助詞の働きからして当然のことであろう。

### (3)「マーク」別にみた文の分布

第一水準の文について、区間ごとにいくつ出るかということグラフにすると図3のようになる。大体の傾向がわかればよいと考えたので表の形では示さないが、例えば1区間に出るガ文の数を表4の該当部分にあるバ・モ・シ・ホの数値を合計すればよい。

1区間でガ文が多くハ文が少なめになるというのは、これまでみてきたことから予想されるし、準ハ文が10区間で増えるということも予想されることである。

### (4)「マーク」「役割」別にみた文の分布

ガ文ならガ文について、バならバが1区間でいくつ出るかというようになことをまとめると、表4になる。これを、(1)と同じように百分率に直してグラフにすると、図4・1〜5のようになる。ただし、所によつては数値がかなり小さいので、このグラフにあまり重大な意味を見いだすのは危険であろう。

まず、図4・1と2のハ文、ガ文のものをみると、大まかに言って増減の傾向は全体の傾向(図2で示される)と同じであると言えよう。仮説に従う分布である。ただし、ガ文にあってはホ文が全体的に低い。このことは、(2)でみた、ガ文はバとモに使われることが多いということから予想されることである。

これに対してハガ文、モ文、準ハ文(図4・3〜5)はかなり特徴的である。一番の特徴は、第1区間においてさえ、バとホが逆転してないことである。つまり、これらの文は最初の方での場面の設定にはあまり使われない。このことはそれぞれの文の性質から考えても首肯できることである。すなわち、これらはすべて既述の話題があることを前提とするものだからである。

しかし、ハガ文には少し注意すべきである。というのは、ハガ文は果たす「役割」の割合はハ文とほとんど変わらないのに(表3)、分布がハ文と異なるからである。1区間でバがホを下回るのもその一つであるが、シが文章の末尾になっても増えないこともその一つである(最後にホの役割が増えるのはその反動にすぎないとみられる)。用例数が少ないのでここではこれ以上述べないが、ハ文とハガ文の機能の違いを考える必要がある。

その他、気になることはまだあるが、これ以上考察はしない。

### (5)その他

最後に、補足として社説の平均像となる数字をあげることにする。平均文数は一つの社説あたり約二九・四文で、そのうちバが三・四個、

モが七・八個、シが二・一個、ホが一五・七個、第三水準の文が〇・五個である。それらが図2のように分布しているのが平均的な社説の文章と言えるだろう。それらの文が何でマークされていればよいかという点について述べる用意はない。

## 六 おわりに

以上、社説六十編を分析した結果を示した。今後はデータの一層の充実をはかること、社説以外の論説文も調査すること、などが課題である。

最後に先行研究について一言するなら、土部一九八五や畠田谷一九八六などが、一つ一つの文に本稿で言う「役割」に似たものを認め、分析している。しかし「区間」という考えは採っていないし、分析した文章も少ない。

## 注

(1) 『岩波国語辞典』『新明解国語辞典』『(小学館) 国語大辞典』などの「論説」の項を参照。

(2) いわゆる転位文もガ文とする。転位文とは次のようなものである。

(幹事はどなたですか?) 私が幹事です。

この文は確かに「幹事は」という題目を含んでいるが、それならなぜ「幹事は私です」と答えないのか。やはり「私が」とガで表現することにも意味があるのである。その点を重視したい。

(3) ハ以外にどのような提題の形式があるかについては、永野一九八六(一五五ページ以下)を参照されたい。

(4) 六十の社説に出現した文末形式のうち、問題のありそうなものはリストにしてあるが、ここでは省略する。永野一九八六(二四九、二五六ページ)を参考にした。

(5) 永野一九八六(二二九ページ以下)を参照。

## 参考文献

- 畠田谷桂子(一九八六)「論説文の文段中心文と文段にみられる特徴」(『国際学友会日本語学校紀要』10)
- 田中章夫(一九八三)「抄録のための言語処理」(『朝倉日本語新講座6』朝倉書店)
- 長尾真編(一九八八)『言語情報処理の高度化のための基礎的研究 総括班研究成果報告書一九八八』(昭和六三年度科学研究費補助金特定研究(1))
- 永野賢(一九八六)『文章論総説』朝倉書店
- 土部弘(一九八五)「文の機能と文章の叙述層」(『国語表現研究』2)
- 茂呂雄二(一九八二)「日本語文章の形式的表示(1)」(『読書科学』25の2)

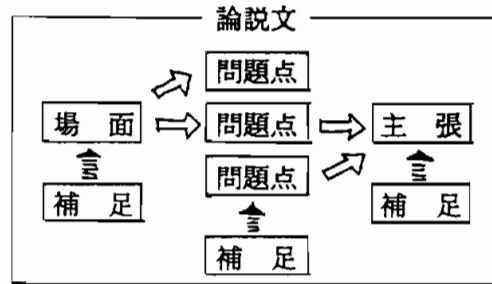


図1 論説文の意味構造(仮説)

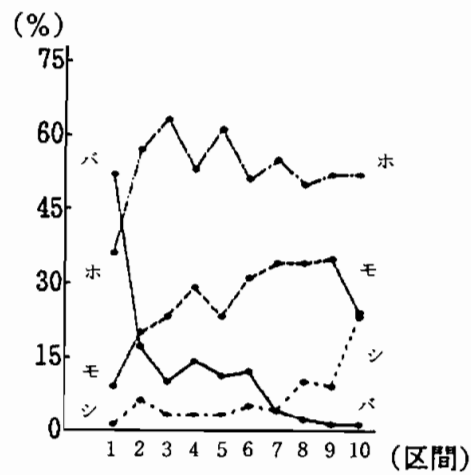


図2 「役割」の分布

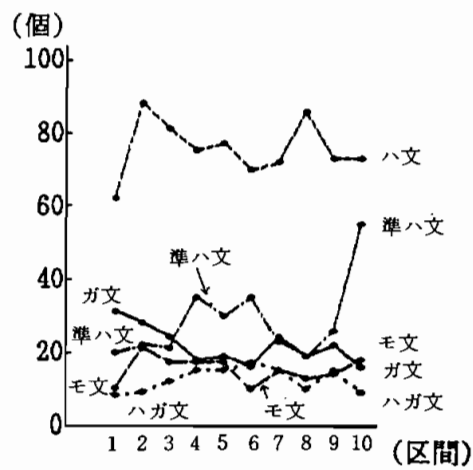


図3 区間ごと文数

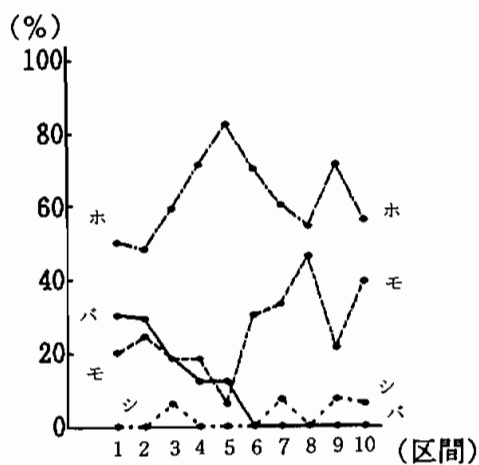


図4・4 モ文の「役割」別分布

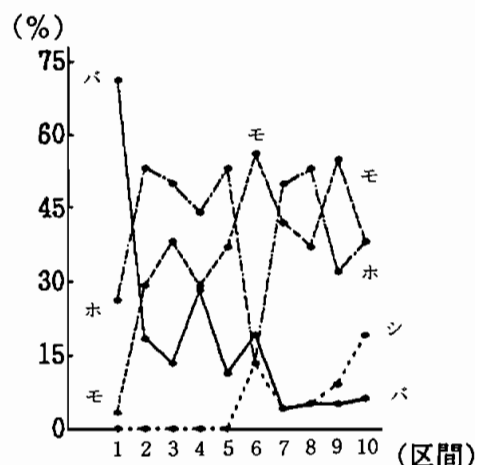


図4・1 ガ文の「役割」別分布

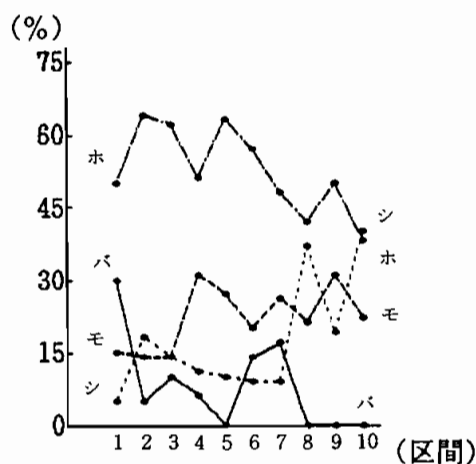


図4・5 準ハ文の「役割」別分布

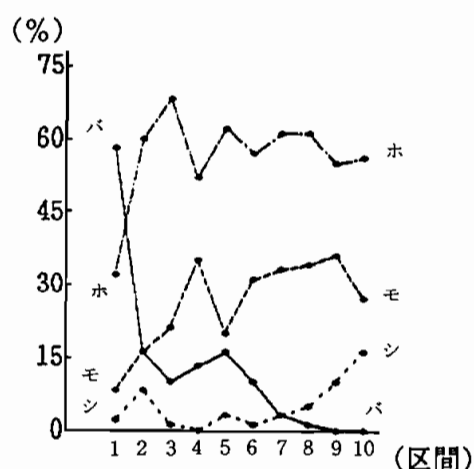


図4・2 ハ文の「役割」別分布

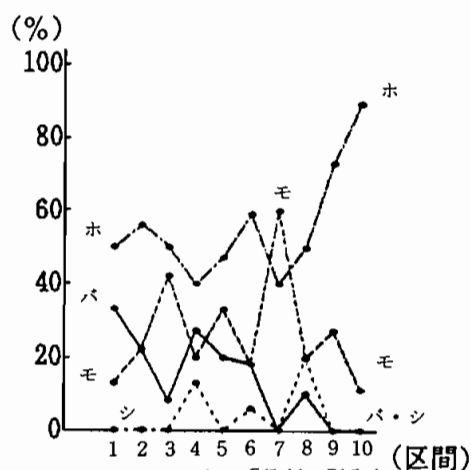


図4・3 ハガ文の「役割」別分布

表1 「役割」の分布(個)

|    | バ   | モ   | シ   | ホ   | *  | 計    |
|----|-----|-----|-----|-----|----|------|
| 1  | 76  | 13  | 1   | 53  | 3  | 146  |
| 2  | 32  | 38  | 11  | 107 | 1  | 189  |
| 3  | 17  | 39  | 5   | 107 | 1  | 169  |
| 4  | 25  | 53  | 6   | 96  | 3  | 183  |
| 5  | 21  | 42  | 6   | 113 | 2  | 184  |
| 6  | 20  | 52  | 8   | 86  | 3  | 169  |
| 7  | 7   | 59  | 7   | 95  | 4  | 172  |
| 8  | 4   | 60  | 18  | 88  | 5  | 175  |
| 9  | 1   | 61  | 16  | 92  | 6  | 176  |
| 10 | 1   | 48  | 46  | 103 | 1  | 199  |
| 計  | 204 | 465 | 124 | 940 | 29 | 1762 |

表2 「役割」からみた「マーク」(%)

|   | 1位       | 2位       | 3位       | 4位         | 5位       |
|---|----------|----------|----------|------------|----------|
| バ | ハ(44.1)  | ガ(21.6)  | 準ハ(9.8)  | ハカ*(8.3)   | モ(7.8)   |
| モ | ハ(42.6)  | ガ(15.9)  | 準ハ(14.0) | モ(8.2)     | ハカ*(7.5) |
| シ | 準ハ(43.5) | ハ(29.8)  | ガ(7.3)   | ハガ/モハ(4.0) |          |
| ホ | ハ(46.0)  | 準ハ(15.6) | モ(10.0)  | ガ(9.6)     | ハカ*(7.2) |

表3 「マーク」からみた「役割」(%)

|     | 1位      | 2位      | 3位      | 4位     |
|-----|---------|---------|---------|--------|
| ハ文  | ホ(57.1) | モ(26.2) | バ(11.9) | シ(4.9) |
| 準ハ文 | ホ(51.4) | モ(22.7) | シ(18.9) | バ(7.0) |
| ガ文  | ホ(41.5) | モ(34.1) | バ(20.3) | シ(4.1) |
| モ文  | ホ(61.8) | モ(25.0) | バ(10.5) | シ(2.6) |
| ハガ文 | ホ(54.4) | モ(28.0) | バ(13.6) | シ(4.0) |

表4 「マーク」「役割」別にみた文の分布（個）

|        | ハ 文 |     |    |     | 準 ハ 文 |    |    |     | ガ 文 |    |   |    | モ 文 |    |   |    | ハ ガ 文 |    |   |    |
|--------|-----|-----|----|-----|-------|----|----|-----|-----|----|---|----|-----|----|---|----|-------|----|---|----|
| 区<br>間 | パ   | モ   | シ  | ホ   | パ     | モ  | シ  | ホ   | パ   | モ  | シ | ホ  | パ   | モ  | シ | ホ  | パ     | モ  | シ | ホ  |
| 1      | 36  | 5   | 1  | 20  | 6     | 3  | 1  | 10  | 22  | 1  | 0 | 8  | 3   | 2  | 0 | 5  | 3     | 1  | 0 | 4  |
| 2      | 14  | 14  | 7  | 53  | 1     | 3  | 4  | 14  | 5   | 8  | 0 | 15 | 6   | 5  | 0 | 10 | 2     | 2  | 0 | 5  |
| 3      | 8   | 17  | 1  | 55  | 2     | 3  | 3  | 13  | 3   | 9  | 0 | 12 | 3   | 3  | 1 | 10 | 1     | 5  | 0 | 6  |
| 4      | 10  | 26  | 0  | 39  | 2     | 11 | 4  | 18  | 5   | 5  | 0 | 8  | 2   | 3  | 0 | 12 | 4     | 3  | 2 | 6  |
| 5      | 12  | 15  | 2  | 48  | 0     | 8  | 3  | 19  | 2   | 7  | 0 | 10 | 2   | 1  | 0 | 14 | 3     | 5  | 0 | 7  |
| 6      | 7   | 22  | 1  | 40  | 5     | 7  | 3  | 20  | 3   | 9  | 2 | 2  | 0   | 3  | 0 | 7  | 3     | 3  | 1 | 10 |
| 7      | 2   | 24  | 2  | 44  | 4     | 6  | 2  | 11  | 1   | 10 | 1 | 12 | 0   | 5  | 1 | 9  | 0     | 9  | 0 | 6  |
| 8      | 1   | 29  | 4  | 52  | 0     | 4  | 7  | 8   | 1   | 7  | 1 | 10 | 0   | 6  | 0 | 7  | 1     | 2  | 2 | 5  |
| 9      | 0   | 26  | 7  | 40  | 0     | 8  | 5  | 13  | 1   | 12 | 2 | 7  | 0   | 3  | 1 | 10 | 0     | 4  | 0 | 11 |
| 10     | 0   | 20  | 12 | 41  | 0     | 12 | 22 | 21  | 1   | 6  | 3 | 6  | 0   | 7  | 1 | 10 | 0     | 1  | 0 | 8  |
| 小<br>計 | 90  | 198 | 37 | 432 | 20    | 65 | 54 | 147 | 44  | 74 | 9 | 90 | 16  | 38 | 4 | 94 | 17    | 35 | 5 | 68 |
| 計      | 757 |     |    |     | 286   |    |    |     | 217 |    |   |    | 152 |    |   |    | 125   |    |   |    |

The Semantic Structure of Editorial Articles

Kōhei Ido